

あとがき

本書は、「日本社会研究Ⅱ 仏教社会としての日本」(『社会科学紀要』東京大学教養学部、第三九輯、一九九〇年三月)を素材にして新たに書き下ろしたものである。

その間における私の研究の進展の主要な成果は、本書とほぼ同時に近代文藝社から刊行された私の論文集『比較経済思想』に収めてある。本書を書き下ろす際に、それらが常に念頭にあったが、本書では、論文集への言及は最小限にとどめておいた。

旧稿の抜き刷りを、かなり多数の方々に配布し、少なからぬ方々からさまざまな有益な示唆を頂くことができた。本書が旧稿と比べていささかなりとも進歩しているとすれば、それは偏にこれらの方々のお陰である。とりわけ、ご多忙にもかかわらず、詳細なコメントをして下さった、東京大学の恒川恵市先生と中央大学の工藤和久先生、本書の出版をおすすめ下さり、情況出版をご紹介下さった東京大学の廣松渉先生には、深くお礼を申し上げたい。また、東京大学、筑波大学およびその他諸大学・研究機関の先生方にも、旧稿をお読み下さった上に、心強いご激励をたまわったことを感謝申し上げるとともに、お名前を省略させていただくご無礼をお許しいただきたい。また、私の研究上の仲間でもあり、少なからぬ論点の実質的な共同研究者でもある、妻満紀と、仕事の邪魔にも、息抜きにも活躍した、一歳の長女日奈子にも、この場を借りて一言礼を

述べておきたい。

今年の初仕事として正月二日に本書の執筆を始めたのだが、今年は聖徳太子摂政・四天王寺開創一四〇〇年であり秋には伊勢神宮の式年遷宮が行われるなど、日本の社会や文化の歴史を省みるのに適した節目の年であることに、後になって気付いた。本書をまとめるよう導いた因縁の不思議を感じている。

最後に、単行本の出版が極めて困難になりつつあるにもかかわらず、あえて手がける決意をなさり、私ごととき若輩に書かせて下さった上に、さまざまなご尽力をたまわった、情況出版の古賀暹・坂内仁・合沢清・横山茂彦の諸氏と、魅力的な装幀をデザインして下さいいづか彬氏に、深く感謝申し上げます。とりわけ、この分野の研究者としても活躍しておられる坂内氏の懇切なご助言がなければ、このような形で本書をまとめることはできなかっただろう。

一九九三年六月 我孫子の寓居にて

平山朝治